

『寓話』について書くか、
書かないか。

阿部公彦

水声社というのはおもしろい出版社で、計ったように二、三年に一度、小島信夫についての原稿依頼をしていく。そのたびに私は「うっ」といったん躊躇するのだが、

3

結局は引き受けてしまう。今回は小泉さんという方から連絡があり、それを私は、ちょうど仕事をしている別の出版社の今泉さんからのメールだと勘違いして反応がしばし遅れたのだが、まもなく気づいてやっぱり「う」と躊躇した。でも、心のどこかで「どうせ引き受けるくせに」とも思っていた。

小島信夫について書くのは、楽なことではない。ましてや「寓話」について書くのはたいへんなことだ。「寓話」というのは長い作品で、戦争中の暗号のことが扱われているとか、別の作品に登場した人物がまた出ているといったことぐらいはわかるのだが、その後は読めども読めども何の話だかよくわからなくて、たとえ最後まで読んだとしても「すでに私、とくに読んだことがあります」などと言って知らん顔で原稿を書いてしまえるようなたやすいものではない。

そんな事情もあってか、小泉さんはその後、「いやいや、もちろん私は「寓話」について書け、という依頼はしましたが、あなたは別に「寓話」について書かなくてもよいのです。関係ないことを書いて構わないのです。もちろん「寓話」について書いてあればすばらしいですが、無理して「寓話」について書かなくなっているのですから」とかいう、どういう含みなのかよくわからない謎かけのような依頼状も送ってこられた。

私がひとつだけ「しめた」と思っているのは、最近刊

行した「幼さという戦略」（朝日選書）という本の中で小島信夫について書いたばかりだったことである。この本では私は「抱擁家族」のことも出てくる江藤淳の『成熟と喪失』を扱っていて、ついでとばかりに小島信夫の作品のあれこれにも話をひろげたのである。

「成熟と喪失」は今では江藤淳の代表作とも言われる作品である。著者はアメリカでの滞在経験や、エリック・H・エリクソンの『幼年期と社会』を読んで受けた印象を元に話の土台をつくっており、熱気と自信とを感じさせる立派な評論となっている。「成熟と喪失」を読むと、たしかに小島の「抱擁家族」についても、「なるほど。合点がいった」と思いそうになる。そして「成熟と喪失」の立派さが感染したかのように、「抱擁家族」という小説も立派な小説だと思えてくる。上野千鶴子も「成熟と喪失」の講談社文芸文庫版の「解説」で、江藤淳は立派だと褒めている。

しかし、自分で「抱擁家族」を読んだ読後感と、「成熟と喪失」を通して「抱擁家族」を読んだ読後感とはなんだか違うのである。そもそも「成熟と喪失」に書かれているような立派な小島信夫を、自分はわざわざ好き好んで読んだりするだろうか。

水声社の小泉さんに「小島信夫について何か書きなさい」と言われて、「う」と思いながらつい引き受けてし

まうのは、この小説家の作品から、「まだまだ。そんなことでは何も言えてない」と急かすような声が聞こえてくるせいである。今や世の中には、何を言っているのかわからない小説や、どんどん脱線してさまようような小説はいくらでもある。そのうちの多くは、安心して見ていられる。別に読まなくても、まったく心配がない。むずむずして読まずにおられないという気になつたりはない。ところが小島信夫はどうだろう。もし小島信夫を読むのは楽か苦痛か、と問われたら、私は「むー」としばらく考えてから、「苦痛」のほうに手を上げてしまうかもしれない。が、これはまんざら苦しいばかりの「苦痛」でもない。マッサージをされていてツボに入ると、思わず「むー」と言ってしまうようになるが、あんな感じである。

小説というのは、ふつうはいきなり人のツボを刺激したりしない。頭や感情についてのデリケートな仄めかしが、まあ、よそ行きのちよつと構えたことばや、立派な身振りで説明されている。ところが「寓話」を含めて小島信夫の、だいたいは中期以降のある種の作品は、いったいそこで何が起きているのかさっぱりわからないのに、突然、なれなれしくことばが近づいてきて急にツボに入ってきて、思わず「むー」と言いそうになるのである。

たとえば「寓話」には以下のような箇所がある。中心

人物とおぼしき浜仲が自身のことを何か言っているらしいのだが、あまり関係のない話に脱線していくようでもある。

たぶん私の申し上げたいことは、—— 思いきつていうことにいたします—— あなたは、私という存在に、私自身が驚くほどの関心を抱いていたということ。なるほど、ほとんど無意味な情報です。無意味というのは情報としてのことです。これはごく最近のことですが、上等兵どのが若い友人のエッセイについて書いているのを読みました。その若い人は、自分のエッセイの題名「意味という病」を、あれは、「病という意味」とした方がよいくらいだったと反省しているのは、「面白かった、といっているように見えました。私の記憶ちがいで、必ずしも題名をそうしたいといっているのではなかったのかも分りません。私はその「面白さ」のわけがよく分りませんでした。私はそのこつておるせいでしょうか、私は、情報の無意味、というようなことも、ひらめきました。しかし、これもアテになりません。たぶんもつとほかのことのような気がするからです。

「寓話」という小説の、読めども読めども何を言っているのかよくわからない感じがよく出ている箇所だ。でも、

少なくとも言えそうなのは、「読めども読めども……」
というくらいのことまでも延々と続く道筋はしつかりあり、それはまだ誰も歩いたことのない藪の中の道のようにもあるのに、強引な力でぐいぐいと引っ張られながら
否応なく前へ前へと歩かされてしまうのである。

ぐいぐい引っ張るのは小島信夫その人である。この作家は、何を言っているのかわからないわりに、読者を引っ張っていかずにはおられないようなエゴの強い人なのだ。あまりにエゴが強いせいで、『寓話』に出てきてしゃべる人がみんな小島信夫語でしゃべっているように思えてしまう。

最後に怖いことを書こう。小島信夫の担当をしていた編集者があることを言った。小泉さんや今泉さんとは違い、この編集者の名前は出さないほうがいいだろう。その人が言ったのは、こんなことである。「小島さんはものすごく磁場が強い人だ。まわりにいる人がみんなおかしくなってしまう。磁石のせいで、時計が狂ってしまうみたいだ」。

なるほど、磁石に引っ張られるようにして読んでしまうのだ。だから、こっちの時計が狂ってしまう。

これぐらいでやめておこう。ツボのことも、きつと、
そういう話なのである。

(あべまさひこ、英文学研究)